

# 魚のように感じられるオブジェの制作

— 「～っぽい」という言葉の具現化 —

宮腰研究室  
G108025 斉藤泰則

## 1. 制作目的

われわれは会話の際、程度を表す語として「～っぽい」という語を用いる。この語は発言者の経験や知識に基づき、対象となる意味を多く含んでいることを表している。その判断は多分に主観的であり、発言者によってその程度は異なる。このことから厳密な意味でのコミュニケーションに適している語とは言い難い。

しかし、日常的な会話において「～っぽい」という語は多用され、ある程度の共通理解を生み出すに足る役割を果たしている。主観的な語であるが、解釈に幅があり、これによって曖昧でありながら、発言者の主観によるイメージの違いを超えて対象の特徴をとらえることに用いられる。

本制作は「～っぽい」という語の持つ幅がどの程度のものなのか、われわれが当たり前のように使用している語のもつ幅を具現化し、表現されたものを見ながら、自身の持つ「～っぽい」について再確認することを目的とする。

## 2. 「～っぽい」の言語的解釈

### (1) 辞書による定義

「～っぽい」の用法は、辞書で以下のように定義されている<sup>21, 22</sup>

#### ぽ・い (接尾)

「っぽい」は、名詞や動詞の連用形などに付く。

- 1 …を多く含んでいるという意を表す。「粉ーい」
- 2 …の傾向が強いという意を表す。「俗ーい」「飽きーい」「荒ーい」

#### っぽ・い

体言、動詞の連用形を作る。

…の傾きがある。…しやすい。「男っーい」「忘れっーい」など、上の語が促音化する。

その他にも、それ以外の形容詞や形容動詞の語幹に付き形容詞を作る。また、近年「出かけるっぽい」「行くっぽい」など、動詞の終止形に付く例が見られる。「～っぽい」という語は辞書で定義された以外の使われ方も多く、幅広く使われる語である。「…

の傾向が強い」というよりは「～らしい、～みたい」といった意味で使われていることが分かる。そのため、話し手のイメージを自身で解釈するしかない。

「忘れっぽい」と「忘れたっぽい」では全く意味が異なり、「忘れたっぽい」は話し手のイメージでしかない。

これらのことから、「～っぽい」という語は主観の強い語であることが分かる。

### (2) モダリティ

「～っぽい」という語はモダリティに分類される語である。モダリティとは発言者の感情を表す語であり、発言者が感じている程度を含む表現に用いられる。この語は使用される側にとっても、コミュニケーションを取るためには同様に程度を判断せざるを得ない。特定の名詞に「～っぽい」を付けた場合、名詞の示す対象について、名詞の意味を含む判断をせざるを得なくなる。

名詞の中には特定のものではなく、ある属性を持ったものまとまりを指して名前をつけたものがある。一般名詞と言われるこの語には、犬や魚などが該当する。これらは日常会話で活用するためには十分に役割を果たすが、そこに含まれるものは膨大であり、何をもってそこに分類されるかは厳密ではない。これらの語に「～っぽい」を付けるとその境界はさらに曖昧になる。

## 3. 調査と制作

### (1) 要素抽出のイメージ調査

制作を行うにあたり、「魚っぽい」という語が持つ幅を明らかにするために、八戸工業大学4年生21人に聞き取り調査を行い、魚という語からイメージされる特徴を抽出した。イメージされた語は「鱗がある」「ヒレ(尾ビレ)がある」「ヌルヌルしている」という3つである。

また、鱗とヒレの形の決定、及び並び順の決定のために画像や他人に書いてもらった絵を参考に並び替えてもらう調査を実施した。得票数が多い画像を魚の要素が強い、得票数が少ない画像を魚の要素が弱いと判断し、並び順を決定した

これらの3つの特徴は魚という語からイメージされた特徴であり、現実の魚から抽出された特徴とは

無関係である。

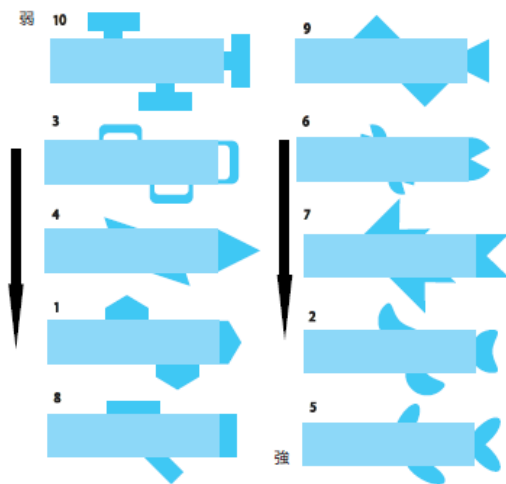


図1 ヒレの要素の並び替えの結果

## (2)制作構成

聞き取り調査から抽出した3つの要素を、各オブジェに振り分け、それぞれ10段階、のオブジェで表現する。

変化させるのは3つの要素のうち1つだけであり、その他は変化させない。30×100mmの円柱状の木材を使用し、白のジェツツで塗装する。



図2 ジェツツによる塗装前(左)と塗装後(右)

## (3)本制作

「鱗がある」という要素については、胴体部分に直接書く、紙粘土で鱗を作る(図3)。

「ヒレがある」という要素については、針金でヒレの形を作り、奉書紙を貼り付ける(図4)。

「ヌルヌルしている」という要素については、「魚の色のイメージ」と「魚のヌルヌルはどのような感じか」という質問を口頭で回答してもらった。結果から、銀色と黒が入ったような青を10段階全てに塗装を行い、クリアという塗料を使用し光沢の度合いによって変化をつけていくことにする(図5)。



図3 鱗を貼り付けたオブジェ

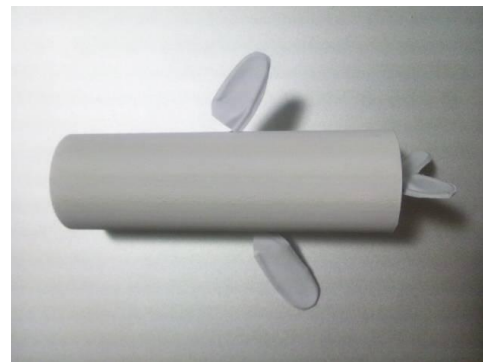


図4 ヒレを付けたオブジェ



図5 ヌルヌル感を出したオブジェ

## 4.まとめ

「～っぽい」とは、「…の傾向が強い」という意味を持つ語である。最近では「～らしい、～みたい」などの意味で使われるなど辞書での用法以外の使われ方もされており、生産性が高い語となっている。

しかし、話し手のイメージからの推量であり、聞き手は話し手のイメージを推量しなければならずお互いのイメージに相違が生まれることは当然である。そんな曖昧な語である「～っぽい」を具現化することで、視覚的に「～っぽい」と感じる境界が分かり、自身のもつ「～っぽい」の再認識ができるのではないかと考える。